

# 「の」「こと」による名詞節の性質

——能格性の観点から——

近藤 泰弘

キーワード：名詞節、準体、能格、非対格性、主語

## 要 旨

本稿は、現代日本語において、「の」「こと」による名詞節が主語として働く場合（「出発した（の/こと）がわかった」など）に見られるいくつかの構文的特徴について記述することを主たる目的としている。

今回の研究では、『日本経済新聞』の1994年の1年間のすべての記事を収めたCD-ROMを資料に用いた。一年間の新聞全記事は、約206MB、のべ約3500万語である。この種のコーパスをどのような意味での言語資料として用いるかについては、日本語ではまだほとんどその研究の蓄積がないため不確定な部分が多いが、本研究ではひとまず単なる大規模データの収集の便宜として利用している（「のが」は25605例、「ことが」は26832例）。

「ことが」節については、他動詞の主語となっていると思われる例はのべ537例あった。逆に、「のが」節の他動詞主語の例は全体で76例にすぎない。その用例数の大半は「功を奏す（＝うまくいく・奏功する）」「目を引く（＝目立つ）」「鍵をにぎる（＝重要だ）」のような自動詞（しかも所動的・非対格的）な慣用句表現になっており、先の「ことが」とはまったくその分布が異なっている。また「ことが」節が使役の主語となる例は21例が存在したのに対し、「のが」節の使役は2例に留まる。

以上のように、「ことが」節がかなり自由に自動詞・他動詞・使役形の主語となるのに対し、「のが」節の分布には強い制限があり、用例の上で見ると、基本的には、非対格自動詞や形容詞・名詞文の主語にしかならないことがわかる。この性質は実は中古日本語の準体の名詞節にも、さらに制限の強い形で同様に存在する（石垣謙二の記述）。

一方、目的語については、中古日本語のいわゆる準体は、現代語の「のを」節と同様目的語にも広く用いられる。この場合の「準体+を」や「のを」節はもちろん意味的には「対象」を指すものである。また、既述のように、中古日本語でも、準体は、現代語の「の」節と同様に非対格自動詞（含む、形容詞）の主語に用いられ、その意味は「対象」であるということになる。結局、古典語の準体も現代語の「の」節も、「対象」という意味についての、自動詞の主語と他動詞の目的語とが同様の扱いを受けるという典型的な能格的分布であると言える。

## 1 中古日本語のいわゆる「作用性用言反撥の法則」

本稿は、現代日本語において、「の」「こと」による名詞節が主語として働く場合（「出発

## (2) 「の」「こと」による名詞節の性質

した(の/こと)がわかった」など)に見られるいくつかの構文的特徴について記述することを主たる目的としているが、その前提として、まず中古(平安時代)日本語の主語名詞節に見られる性質について述べておくことにする。

石垣謙二による中古日本語の構文研究の成果のひとつに、「作用性用言反撥の法則」というものがある(石垣謙二1955)。この「法則」を、現在の一般的な用語を用いて説明すると、名詞節が主語となる複文において、次のような規則となるだろう。

1. 主語の名詞節がモノ・ヒトの意味となり、(通常とは逆に右に主名詞を持つ)一種の関係節(S.-Y. Kuroda 1992の用語では pivot-independent relativization)を構成する場合、その関係節内部の述語用言はかならず〔状態性+〕である(主文の述語には制限がない)。次の例文では、「ある人の子」が主名詞であり、「童なる」の部分に〔状態性+〕の制限がある。  
[ある人の子の童なる]、ひそかにいふ(土佐日記)
2. 主語である準体がコトの意味で、名詞節(補足節)を構成する場合は、その名詞節内部の用言には制限がないが、その代わり、主文の述語がかならず〔状態性+〕である。  
[手たたげばやまびこの答ふる]、いと煩はし。(源氏・夕顔)  
このような文型である。この場合の述語は「煩はし」という形容詞であるが、ここが決して動詞にはならないというわけである。
3. 上記2種類の規則をあわせると、主語となる従属節の用言か、主文の述語用言かのいずれかが必ず〔状態性+〕になる(両方とも〔状態性-〕(石垣の用語で作用性)となることはない)。

この3番目のものが「作用性用言反撥の法則」と言われるものの本体であるが、3は1と2から自動的に導かれることであるから、実際には1と2とが問題となる。このうち1の規則については、稿者はその解釈を別に述べている(近藤1992)ので今回は省略し、本稿では、この2がどのようなことを意味しているかについて現代語も合わせて考察し、その結果、石垣の解釈を改訂し、より適切で、かつ中古語・現代語を通して適用可能な規則を提案したい。

すぐにわかるように、この2の規則は、そのままの形では現代語には適用できそうもない。現代語の名詞節主語としては「の」「こと」を補文化辞とするものが代表的であるが、「来る(の/こと)が決まる」「着く(の/こと)が遅れた」のように、主文に自由に動詞述語を持つことができるように見えるからである。

一方、中古語における石垣の規則の設定自体に疑問を投げかける向きも以前から存在する。早くは青木伶子氏(青木1956)が、石垣法則が動詞・助動詞すべてを概括して「状態」という枠で分類したことを問題として指摘しているが、近年、重見一行氏(重見1994)が注目すべき指摘を行っている。氏は、石垣の示す文型を再検討して、その述語は、「状態性」

というよりも、三上章 1972 の分類によるいわゆる「所動詞」に偏るものと考えた方がよく、「動作」というより、主部の「評価」的叙述となる(165頁)と述べている。能動・所動ということをも重視すべきだということである。また、中山昌久氏も石垣法則は、状態性・非状態性<sup>注1</sup>というより、能格性の方向から考えるべきであることを示したことがある。

ところで、近年のタイポロジーの発展や一部の生成文法理論の影響により、日本語のような一般的な対格言語においても、他動詞の目的語と、自動詞の主語とに共通性があるということ、すなわち能格性が観察されることが急速にクローズアップされてきた。発表者も古典語の能格性について述べたことがあるが(近藤 1993)、最近では、影山太郎氏による研究(影山太郎 1993)が詳細なものである。氏の研究は、自動詞の中にも、能格性の観点から2種類のものがあるという説を紹介し、それが日本語においても、従来考えられていたよりも非常に広範囲にわたって語彙形成の上に影響を与えていることを実証したものである。自動詞の種類としては、次のふたつになる。

1. 非対格(能格的)自動詞 その主語が、他動詞の目的語(対象)と近い性格を持つもの(固まる・落ちる・ある・見える、等)
2. 非能格(対格的)自動詞 その主語が、他動詞の主語(動作主)と近い性格を持つもの(走る・遊ぶ・泳ぐ・泣く、等)

この1と2の生成文法の立場による分類(非対格性の仮説)は、国文法史の上からは、三上章の所動詞・能動詞の分類に近いものであるが、タイポロジーの立場からは、対格言語に見られる部分的能格性(split ergativity)<sup>注2</sup>について論じたものであると言える。また、日本語の形容詞は、この観点からすると、1の非対格自動詞に分類されるべきものであろう<sup>注3</sup>。以上のように現在の研究状況から考えると、石垣の「状態性」という見方は、「能格性」という観点から見直すことができると思われるのであり、以下、現代語の分析もそのような観点から進めてみたい。

## 2 大量言語処理による観察

ところで、「の・こと」による名詞節を主語とする文型の出現率は、現代語においても極めて多いというわけではない。特に石垣法則の1で示した pivot-independent relativization(例、「友達で三歳若いのが海外勤務になった」)の実例は書き言葉においてはひじょうに少ない。また、発表者の従来からの観察では、発現例の少ない文法現象ほど、内省による文法判断にはあやふやな部分が増えてくる。以前別稿(近藤 1993b)で示した例では、「さえが」という接続は、内省では存在すると言い切ることがむずかしいと思われるが、実際には、小数ではあるが、実例があり、その文脈では他に言い換えのむずかしいものであるということがあった。

名詞節についても、内省だけでは、十分な研究は不可能ではないまでも、いろいろな制約がある。そこで、今回は、近年、高速化・大容量化が急速に進んでいる計算機を利用し

#### (4) 「の」「こと」による名詞節の性質

た大量言語処理によってこの問題を解決することを試みた。

今回の研究では、『日本経済新聞』の1994年の1年間のすべての記事を取めたCD-ROMを資料に用いた。『日本経済新聞』CD-ROMは<sup>注4</sup>研究資料として利用する上での著作権問題が完全にクリアされている資料であるからである。また日経新聞CD-ROMからテキストデータを抽出するソフトウェアも言語処理学会を通して配布されている。これはPerl言語で記述されており、ワークステーション・パソコン等で動作する。なお、形態素解析(単語への分解)が必要な場合は、インターネット上で公開されているフリーソフトウェアである日本語形態素解析ソフトウェアJUMAN 2.0を用いた。JUMAN 2.0は京都大学工学部長尾研究室で開発され、奈良先端科学技術大学院大学の松本研究室より配布されていたソフトウェアであり、C言語で記述されており、各種ワークステーション等で動作する。<sup>注5</sup>発表者は、主にSUN OS 4.1.3およびLinux 1.1.59の上で、これらの作業を行った。以上で述べた新聞データの詳細については、インターネット上の言語処理学会のWebpage<URL <http://www.kyutech.ac.jp/nlp/>>をご覧ください。

ところで、一年間の新聞全記事は、約206MB、のべ約3500万語である。<sup>注6</sup>この約3500万語中から、「のが」「ことが」の形態による名詞節(以下、「のが」節・「ことが」節と呼ぶ)主語を、プログラムによりKWIC形式に抽出し各種プログラムでできるだけ編集して、最後は人間の目で確認を行って、データを作成した。この種のコーパスをどのような意味での言語資料として用いるかについては、日本語ではまだほとんどその研究の蓄積がないため不確定な部分が多いが、本研究ではひとまず単なる大規模データの収集の便宜として利用している。また、以下では、データの状況を示すためあえて通常より多くの例をKWIC形式のままの状態を示した。

「が」ではなく「は」によるもの(「のは」「ことは」)についても同様な作業を行ったが、今回の問題に関する限り「が」の場合と有意な差はなかったため、今回の論文では省略した。

### 3 「のが」節・「ことが」節に対する述語の分布

従来も「の」「こと」についての研究は多く、かなりの成果がある。<sup>注8</sup>しかし、主に目的語になる場合の研究であり、主語になる場合についての記述はあまりない。今回計算機で用例を採集してみたところ(「のが」は25605例、「ことが」は26832例)、「のが」節と「ことが」節とでは、次のような顕著な差異があることがわかった。

#### 3.1 他動詞の分布

まず、「ことが」節について、他動詞の主語となっていると思われる例はのべ537例あった。例を以下にいくつか示す。

関係については「冷戦の枠が取れたことが決定的な変化をもたらした。

ーが手掛けにくい商品に取り組んだことがチャンスを広げた。同社は今

葉樹をすみずみまで植えてしまったことが被害を大きくした。あと二年とは結果的に遅すぎた」と発言したことが債券の売りを加速した。「こ半期以降、一転して増え続けていることがこれを裏付ける。の実需にも回復の兆しがみられないことが買い方の動揺を誘っている。べ約三割安く、品質も向上していることが不況下で人気を呼んでいる。し、不動産需要の伸びが続いていることが拍車をかけている。香港政府九三年六月末時点)にまで低下したことがそれを端的に物語っている。ないのだろうか。年が明け、転職のことが頭をかすめるようになった一。大学はいいところに就職させることが大学の評価を高め、それが生け入れてくれない。定職につけないことが彼らの更生を妨げ、再び犯罪、がうまく女性関係も華やかだったことがカルロス神話を作った、と述べて生産すれば、必ず見返りがあったことが農家の栽培意欲を支えてきた阪神五大市場間の競合にさらされたことが斜陽を招いた。巻き返しには精神を発揮し、技術革新に取り組むことが今後を切り開く」(藤森鉄雄の売上高に現在、大きな差がついたことがそれを証明している。キャノ甲論乙駁(こうろんおつぱく)することが、最善の判断を生む)というの舞台で重要なプレーヤーになったことが、競争の条件を変えた。第一への資金シフトがスムーズに進んだことが市場を活性化し、景気回復の生かして、製品の基幹技術を育てることが商品の競争力を高める」「済調査機関が悲観的な見方を出したことが、企業の見方に影響を与えた入った格好。株式相場が持ち直したことが、円買いを誘った。一一二場で北海プレント相場が堅調だったことがWTI相場を支えた。ただ手

以上のようにその文型はかなり多様である。このように、「ことが」節は、一般的に他動詞の主語となると言ってよいだろう。

なお、これらの他動詞の性格における偏りについてここで少々観察しておく。まず、かなりの量を占めるのは、「高める」「変える」「広げる」等の使役の意味を内包するものである(高まらせる、変わらせる、広がらせる、の意)。これらは形態上は他動詞であるが、実質は自動+使役であるとも言える。したがって、これらの場合、「ことが」が示す意味も「動作主」というよりは、「原因」というほうがふさわしい。「こと」は次節で示すように、「せる・させる」による通常の使役も自由にとることができるのであるから、この種のものについてはそれらと同様に考えることができる。なお、また、使役の主(原因)だけではなく、動作主とみなすことができるもの(支える・招く・切り開く・誘う、等)も存在する。

ところで、次のように、逆に、「のが」節の他動詞主語の例は全体で76例にすぎない(括弧内は同じ述語動詞例による用例数である)。

って急騰した業種が大幅に下落したのが目を引いた。これに対し外国人(21)

## (6) 「の」「こと」による名詞節の性質

を抑えるなど経費を切り詰めているのが功を奏するためだ。ただ、経常(14)イナスの六・三%と大幅に低下したのが足を引っ張った。在庫指数が(8)が移転先の事務所確保を強いられたのが需要を押し上げた。(6)なら無料で手軽に検診を受けられるのが人気を呼び、開設当初から希望(3)の利上げ実施の可能性がやや薄れたのが買いを誘った。欧州債の上昇も(3)も一月末にデザインや味を改良したのが効果をあげて同四三%伸ばした(2)と未公開の立体作品を一堂に集めたのが話題を集めた。公開直後の週末(2)は、「二十六―二十八歳」と答えたのが全体の四五%を占める。結婚(2)、二十六日には百三十八万株買ったのが人気に火を付けた。○…パー(2)期は期中に食肉価格が値下がりしたのが収益を圧迫したが、今期は商社(1)や英ペアリングに粘り強く折衝したのが実を結んだ。九四年九月中旬期(1)だ。事前に徹底した市場調査をするのがカギを握っている」——今、(1)が九十億円の負債を抱えて倒産したのが負債額を引き上げている。富(1)三億円)の退職金の支払いを決めたのが批判を加速した。今年に入って(1)きはぜんそくの前兆の症状と考えるのが当を得ていると思う。このよう(1)場債を売った業者が玉を手当てしたのが相場を下支えしたとの見方もあ(1)からは焼きたてパンの販売を始めたのが売り上げ増を促進した。また(1)品が同一二・七%それぞれ下落したのが全体を押し下げた。全体では三(1)各社が水割りウイスキーを発売したのが需要を喚起した。しょうちゅう(1)が本当の国際化ではないか」というのが持論を実行しているわけだ。だ(1)を配属するなど、いろいろ配慮したのがいい結果をもたらしたのではな(1)必要なのか」という慎重論があったのが、それを裏付けている。政府内(1)

これが他動詞のことなり語の用例のすべてであるが、この例でわかるようにその用例数の大半は「目を引く(=目立つ)」「功を奏す(=うまくいく・奏功する)」「鍵をにぎる(=重要だ)」「実を結ぶ(=結実する)」「当を得る(=あたる)」「効果をあげる(=うまくゆく)」のような自動詞(しかも所動的・非対格)的な慣用句表現になっており、先の「ことが」とはまったくその分布が異なっている。例外となるのは「……のが批判を加速した」「……のがそれを裏付ける」など少数であり、これらの例より「のが」節は非常に他動詞をとりにくいと言ってよいものであると考えられる。

### 3.2 使役の分布

次に「ことが」節が使役の主語となる例は次のように21例が存在した。

あいまいで、説明や開示が不十分なことが入居者を戸惑わせている。高年度中に発行する方針と伝えられたことが、株式需給を悪化させると嫌った時の生き方を想像できなかった」ことが、不安感を募らせていたと振

った米国の需要が減少し始めていることが市場の雰囲気をも弱気にさせている。制がん効果があるとされることが、イカ墨ブームを加速させた疲れた体で暴飲暴食を続けていた」ことが病状を悪化させた。「もし騰などを背景に投資人気が高まったことが売買高を膨らませた。需要流」ではだめだ。名称を福祉としたことが決定的に国民を怒らせた」と「北朝鮮問題をとりあえず回避したことが日本株見直しを加速させていると通常貯金の金利差が縮小していることが定額シフトを鈍くさせているメーカーが見当たらない。こうしたことが国内各社の計画を強気にさせるが入り乱れて用地の手当てに走ったことが、住宅地価の下落を鈍らせた危険な株取引を担当させ続けてきたことが損害をいたずらに拡大させたを聞いて計画を進めようとしていることが企業を前向きにさせているのの存在そのものが脅かされていることが私を悲しませ、絶望のふちに報交換を積極的に進めてこなかったことが保険摩擦を深刻化させた」と比較優位の原則をもっと機能させることが、水平分業を促進させ、生産外に比較的慎重な融資姿勢を続けることが、景気の回復テンポを鈍らせてに引き上げる方針を明らかにしたことが売買高を膨らませたが、市場は追い証も発生している」(日興) ことが需給関係をさらに悪化させてっているのは、株式相場が動かないことが投資家の購入意欲を減退させ

以上のように「ことが」節が使役をとることは明らかである。なお、注意すべき点は、これらの使役がすべていわゆる「を」使役であって、「に」使役がないことである。このことがどのようなことを意味するのかは今のところ明らかでないが、注目しておきたい。

次に「のが」節が使役をとる例は次のただ2例だけであった。ここでも、他動詞の場合と同様に「のが」節が特異性を示していることになる。

考慮せず、従来通りの生産を続けたのが事態を一層悪化させたというの超えた部分を個人の努力にゆだねるのが、社会の活力を永続させ、結果

### 3.3 他の述語文型

ここでは、その他の動詞の例を分類して示す。これらの例は先に述べたように全体で数万例に及ぶのでここではその詳細は省略する。

#### 非対格自動詞

米に、羽田副総理・外相が同行することが十三日、固まった。難航してを敷設するプロジェクトを受注することが内定した。発注元はフィリピン抱えるわれわれにはかえって面倒なことが増える」とか「道州制の方が

#### (8) 「の」「こと」による名詞節の性質

、母親が起こすのを忘れ、家を出るのが遅れてしまい、命拾いをした。感のつかみにくい状況が続いているのが影響している。中心限月は十四だが、投球フォームに威圧感のないのが気にかかる。ハートリー（ロ

#### イ・ナ形容詞

会員数を増やしながらか定着していくことが重要だ。他との協調も大事だ。酸性雨問題に対する共通認識を作ることが大切である。さらに、対策しい農家は高価な農薬や肥料を買うことが難しい。農業バイオ技術が普及。[みんな「演技なんかしてないのがいいですね」と言うが、演技を時代や産業力の違いが浮かび上がるのがおもしろい]。会社でも情報の配当は困難。無配に追い込まれるのがほぼ確実である。余裕の乏しい

#### 名詞文・分裂文

にコンテナ用の大型岸壁を整備することが主な内容。九四年度中に計画立ての金利減免を受け入れてもらうことが先決だ。最初の支援取り付け小店舗のうち地元が半数以上であることが条件。同地域周辺では「ラする苦痛から農家を解放してくれたのが除草剤だ。農薬をできるだけ使用の経営権を取得すると発表したのがきっかけ。「マルチメディアの“根無し草”になりかねないというのが議員共通の心理だ。「小選挙区

名詞述語文型については、「ことが」節の場合は、名詞文となり、「のが」節の場合はいわゆる（疑似）分裂文となる。

ここに示したものは一例であるが、「ことが」節・「のが」節ともに非対格自動詞・形容詞・名詞述語が多く、逆に非能格自動詞の例はない。<sup>注9</sup>「……のが気にかかる」の「気にかかる」などはきわめて典型的な非対格自動詞の例である。

なお、「のが」節はもちろんのこと、他動詞主語となることのできる「ことが」節にも、非能格自動詞の例がない点については、非能格自動詞主語の方が他動詞主語よりも動作主性が強いことを意味するもの<sup>注10</sup>と思われるが、「ことが」節の性格については古典語も合わせてさらに検討したい。

#### 4 現代語と中古語の名詞節の性質

以上のように、「ことが」節がかなり自由に自動詞・他動詞・使役形の主語となるのに対し、「のが」節の分布には強い制限があり、用例の上で見ると、基本的には、非対格自動詞や形容詞・名詞文の主語にしかならないことがわかる。これらの現代語における状況から考えると、最初に示した中古語の石垣法則の2番目の制限(状態性+)は、現代語の「のが」節に見られるこの制限のサブセットであると思われる。なぜなら、形容詞の類は、前



述のように広義の非対格自動詞の一部に含まれるからである。

中古語の場合は、先の例では形容詞などが述語である場合だけを示してきたが、すでに石垣自身が記述しているように、実は中古語でも「見ゆ」「聞こゆ」などのごく少数の一般には〔状態性+〕<sup>註11</sup>とは言いにくい非対格自動詞も、準体主語の述語となるのであり、これらの非対格自動詞の使用範囲がさらに拡大しているものが現代語の「の」節の現状であると言えよう。したがって石垣の解釈(用言の「状態性」だけによるもの)よりも、本稿の解釈(動詞の「能格性(非対格性)」をも考慮するもの)によることによって、中古語・現代語ともにまったく同じ規則によって説明できることになると考えられ、その方がより妥当なものであると考える。

以上の論述を、目的語の場合も含めて、意味的な側面から見直すと次のように言うこともできる。

一般に、中古語でも現代語でも、いわゆる準体や「の」節は、「浪のいとしろくたつを見て(伊勢物語)」「彼が来るのを知った」のように目的語にも広く用いられる。この場合の「準体+を」や「のを」節はもちろん意味的には「対象」を指すものである。非対格自動詞(含む、形容詞)の主語の場合も、既述のように、非対格主語ということで、その意味は「対象」であるということになるので、結局、古典語の準体による名詞節も現代語の「の」による名詞節も、次のような形で「対象」という意味についての自他対応を示すことになる。

{名詞節<対象>(主語) (+が+) (非対格) 自動詞(形容詞・名詞文を含む)  
 {名詞節<対象>(目的語) (+を+) 他動詞

このように自動詞の主語と他動詞の目的語とが同様の扱いを受けるという典型的な能格的分布であると言える。日本語の複文の中で極めて重要な位置を占める、古典語のいわゆる準体句と、現代語の「の」節は、文の中で「対象」としてしか働かないという性質を共有していることになる。現代語の「の」節が古典語の準体の直接の子孫であるかどうかについては議論の余地はあろうが、この性質に関して言えば、上代から現代まで一貫した部分があることになろう。それに対して「こと」節は現代語<sup>註12</sup>においてそのような性質を持っておらず、基本的には異なるものであると考えられるのである。

「の」「こと」の使い分けなど名詞節の性質の多くについては、もちろん本稿で述べたことでそのすべてが説明できるわけではないが、その性質のうち、内省だけではとらえにくい重要な一点について本稿ではその記述を行った。

\* 本研究については、次の各研究費の支給を受けた。平成8、9年度文部省科学研究費・重点領域研究「人文科学とコンピュータ」計画研究「テキスト処理」(研究代表者・安永尚志)、同・基盤研究B「超大規模データによる構文研究手法の研究」(研究代表者・近藤泰弘)、同・国際学術研究「日韓中英の比較統語論にもとづく普遍文法構築のこころみ」(研究代表者・田窪行則)。また平成8年度国語学会春季大会で本稿の内容の一部について研究発表を行った。

(10) 「の」「こと」による名詞節の性質

注1 著者への直話

注2 Dixon, R. M. W. 1994 など参照

注3 例えば、川端 1958 の述べるような意味での「形容詞文」が「非対格自動詞文」に近い。「形容詞文」の「対象」の問題についても同論文を参照されたい。

注4 言語処理学会と日本経済新聞社との間で研究使用について交渉を行い、会員が個別に契約を交わすことで、1990年以降のすべての新聞CD-ROMについて研究に利用することができる。なお、毎日新聞についても同様な契約ができる。

注5 現在はJUMANは改良版である「茶釜」およびJUMAN 3.1の二種類のバージョンアップ版がある。これらのソフトについては、松本研究室のWebpage<URL http://cactus.aist-nara.ac.jp/>と長尾研究室のWebpage<URL http://pine.kuee.kyoto-u.ac.jp>を参照。

注6 この語数はJUMAN 2.0によって形態素解析したものによっている。JUMANでは未知語が過度に分解される傾向があるので、やや多めに数えられている。

注7 従来、大量用例による国語学研究所の例としては、『現代雑誌九十種の用語用字』（国立国語研究所・1962-1964）がのべ40万語、『日本語品詞列集成』（電子技術総合研究所・1975）がのべ98万語である。ちなみに古典語では、『源氏物語』がのべ約20万語である。

注8 Josephs 1976をはじめ、近年では、工藤真由美 1985、橋本修 1990、Shinzato 1996など。

注9 それぞれに固有の特質についてはまた別途記述したい。「ことが」節に特徴的な「表面化する」「決まる」「可能だ」、「のが」節に特徴的な「実態だ」「精一杯だ」「大変だ」など。

注10 国語学会研究発表時に、三宅知宏氏、金水敏氏より、「ことが」節における他動詞に語彙的使役動詞が多いことから、他動性より使役性を重視すべきではないかとの指摘があったが、本稿で示したように「ことが」節の他動の例には動作主の例もあることからここではその解釈はとらない。

注11 なお、石垣は「見ゆ」なども[状態性+]であると解釈している。

注12 古典語における「こと」節の分布については別稿を用意しているが、次のように準体とは異なり、すでに自動詞の主語の例もかなりあるなど、相当に異なっている。なお、平安時代においては、「こと」節が使役や他動の主語となる例ははまだ見いだしていない。おそらく近世以降に発生したものであろう。「の」節の性格の移り変わりについても別稿を期した。

「恨めしと思ひきこえさせつべきことの出でまうで来たるを」（源氏・乙女）

「聞きにくかりぬべきことの出で来添ひぬべきが」（源氏・夕霧）

### 参考文献

- [1] 青木伶子、1956、書評石垣謙二著「助詞の歴史的研究」、国語と国文学 33-6
- [2] 石垣謙二、1955、助詞の歴史的研究、岩波書店
- [3] 影山太郎、1993、文法と語形成、ひつじ書房
- [4] 川端善明、1958、形容詞文、国語国文 27-12
- [5] 工藤真由美、1985、ノ、コトの使い分けと動詞の種類、解釈と鑑賞 50-3
- [6] 近藤泰弘、1992、古典語の形状性準体構造をめぐって、小林芳規博士退官記念国語学論集（汲古書院）
- [7] 近藤泰弘、1993、日本語における異主語省略と能格性、国語研究（明治書院）
- [8] 近藤泰弘、1993b、文法研究における大量言語データ——副助詞研究を例にして——、武蔵野文学

- [9] 重見一行. 1994. 助詞の構文機能研究. 和泉書院
- [10] 橋本修. 1990. 補文標識「の」「こと」の分布に関わる意味規則. 国語学 163
- [11] 三上章. 1972. 現代語法序説. くろしお出版
- [12] Dixon, R. M. W. 1994. Ergativity. Cambridge U. P.
- [13] Josephs, Lewis. 1976. Complementation. Japanese Generative Grammar. Academic Press
- [14] Kuroda, S.-Y. 1992. Japanese Syntax and Semantics. Kluwer Academic Publishers
- Shinzato, Rumiko. 1996. A Cognitive Analysis of Structural Dichotomies. 言語研究 109

——青山学院大学助教授——

(平成9年2月18日 受理)